

Richard Rolle の英文書簡体作品と S-O-V 型の語順

久保内 端郎

これはさきに『英語の歴史と構造』(宮部菊男教授還暦記念論文集。研究社、1978年春刊行予定)のためにまとめた拙稿「Richard Rolle の“Epistles”における語順について」に続くもので、ここでは前稿で詳細に検討できなかった問題の一つを選び、それに関する調査の中間報告を行ないたいと思う。全体を2部に分け、第1部でこの調査作業に至るまでの経緯を前稿の要約を交えて明らかにし、第2部でその調査報告を行なうこととする。

1

英国14世紀の神秘主義者、Hampoleの隠者 Richard Rolle (c1300-1349)の著作は14-15世紀を通じての中世英国で最も広く読まれたものである。代表的な作品には数多くの写本が残っており、H. E. Allen⁽¹⁾によれば、例えばラテン語の論文 *Emendatio Vitae* には現存するものでも90種の写本が数えられるというが、その数の多さが何よりもそのことを物語っている。また、14世紀中葉の書写とされる MS. Tiber. E vii には Rolle の書簡体作品の一つ *The Form of Living* の第1章の内容を平易にして860行余りの韻文にしたもの (William Nassyngton の作と推定されている)が見出される⁽²⁾が、これも彼の著作が当時如何に熱心に読まれていたかを示すものであろう。C. Horst-

man は彼を「真の意味でのイギリス文学の父」とまで呼び⁽³⁾、R. W. Chambers も *On the Continuity of English Prose from Alfred to More and his School* (E. E. T. S., o. s. 1914, 1932)の中で Rolle に Alfred 王から Thomas More に至る英語散文の発達史の上で極めて高い位置を与えている (pp. ciff.). Horstman の評言の妥当性はさておき、Chambers の評価は英語散文の連続性の問題を検討する上で重要な意味を持ち、その意味する所は何であるか吟味しておく必要があると考えられる。

Chambers が Rolle に高い地位を与えるのは何よりも Rolle の散文の文体のもつ近代的性格の故である。そしてその文体の近代性 (modernity) を Chambers は Rolle の語順の用法に求める。

...anyone who reads these tracts must see that, despite their Fourteenth-Century Yorkshire dialect, we have in them modern English prose. The spelling and form of the words, sometimes the actual vocabulary, may be strange; but the arrangement of the words is modern (p. ci).

しかし、その語順における 'modernity' を Rolle の散文の全作品を通じて見た場合、果して全面的に主張し得るのであろうかと問う時、われわれはそこに多くの中世的要素をも

また数多く見出し、可能なりと直ちに答えることに躊躇せざるを得ないのである。その‘modernity’を Rolle における文の主成分（主語・動詞・目的語・補語・副詞的要素等）間の配列法の、近代英語におけるそれとの近似性に求めるならば、その答は否とせざるを得ないのである。しかしまた、他方、彼の散文の中でも *Ego Dormio, The Commandment, The Form of Living* などの通常 “Rolle's Epistles” と呼ばれる書簡体作品に限って見た場合は、少しく事情が異なり、Chambers のさきの主張が或る程度首肯できる印象を覚えることもまた事実である。そこでわれわれは Rolle の語順の用法を各々の作品について検討する必要があることに思い至る。諸種の語順の型についてその使用例の分布状態を各作品について検討していけば、われわれの感じたその印象を裏付ける結果が得られるのではなからうか。

その使用例の分布状態を観察すべき語順の型としては、当時のその当該の方言に基礎をおく文語における major な型、すなわち文体的に ‘unmarked’ な形式ばかりでなく、minor な型、すなわち新語法的或いは旧語法的な形式・口語体或いは韻文体を想起させ

る形式・地域方言または階級方言における異方言感を喚起するために用いられる形式・個人言語的特色を示す形式等々からなる文体的に ‘marked’ な形式をもまた取り上げるべきである。いやむしろ後者の形式の用法においてこそ著者の文体的意図がより明白に看取されると考えられよう。ここで取り上げる独立節における S-O-V 型語順は後者の端的な例の一つである。

独立節におけるこの型の語順は、古英語以来衰退の一途を辿り、14 世紀末頃迄には名詞目的語のそれが、15 世紀末頃迄には代名詞目的語の場合のそれも、特に擬古的文語体或いは韻文体を意図する場合を除き、散文からは殆ど姿を消す運命にあるのであるから、従ってこの語順の有無は、中英語期の作品の言語的側面における新しさ・旧さを計る判定材料の一つとして、言わば試金石的存在として考えることができるものである。Rolle の著作した時期すなわち 14 世紀前半期の Yorkshire 方言の散文においてもこの型の語順は既に擬古的な文語体ないし韻文体を想起させる形となりつつあったと考えられるので、この語順の分布は Rolle の各作品に対する文体的考慮を計る一つの指標と考えることが

第1表

	(Horstman)	S - On - V		S-Opr-V	
		(a)	(b)	(a)	(b)
1. <i>The Form of Living</i>	(3- 49)	—	—	—	—
2. <i>Ego Dormio</i>	(49- 61)	—	—	—	—
3. <i>The Commandment</i>	(61- 71)	—	—	—	—
4. <i>Meditations on the Passion</i>	(83-103)	+	—	+	+
5. <i>Meditation on the Passion and of Three Arrows on Doomsday</i>	(112-121)	—	+	+	+
6. <i>Our Daily Work</i>	(137-156, 300-305)	—	—	+	+
	(310-321)	+	—	+	+
7. <i>On Prayer</i>	(295-300)	—	—	—	—
8. 小品雑篇					
<i>Gastly Gladnesse</i>	(81)	—	—	—	—
<i>The Bee</i>	(193-194)	—	—	—	—
<i>On the Ten Commandments</i>	(195-196)	—	—	+	—
<i>Desyre and Delit</i>	(197)	—	—	—	—

でき、その調査は意味を持つと言える。

名詞目的語・代名詞目的語それぞれの場合のその語順の分布を各作品について見ると前頁の第1表ようになる。(a), (b) はそれぞれ *and*, *bot* 'but', *for* 等に導かれない独立節と導かれる独立節を指す。+ は用例の有無を示す。なお作品の分量を示す目やすとして、利用した Horstman 版テキストの該当ページを () 内に記しておいた。なおまた散文作品中に挿入された韻文はここでは対象外とする。

この結果は、独立節における S-O-V 語順は名詞目的語のそれであれ、代名詞目的語のそれであれ、Rolle の書簡体作品 1, 2, 3 には (a), (b) 何れの環境においても現われては来ないことをわれわれに示している。もっとも 7, 8 にも現われてはいないが、7 は内的証拠・外的証拠何れも積極的に Rolle の真作であることを証明し得ずあること、また 8 は資料としてのその分量の少なさを理由にここではこれらは考慮の外に置かざるを得ないが、書簡体作品に対して払った文体的考慮がこれらにも働いている可能性を認めることはできよう。

ここで他の作品に見出されるこの語順の例を検討しておきたい。例の多くはキリストの受難の場面或いはその他の聖書中の場面を、情感をこめて述べているコンテキストに見出される。

(1) H 89/26⁽⁶⁾ A, lord, *pou it took* and tastyd pere-offe; (おお主よ、御身はそれを取り嘗め給いき)

(2) H 114/16, 17 (MS. Rawl. C 285) and als naked als he hangede, gude *he nane had* hym with for to hide, bot *his moder curchife knetted* about his lymys. (彼十字架につけられし時のままに裸体にてあれば身を包むものとして何一つ持たざりき。されど彼の母頭布もて股のまわりに結わいつけたり)

(3) H 118/34, 35 (MS. Rawl. C 285) Of þe erth *I þe toke* and made þe with my hende, and in paradise þat lufely stede *I þe stalled* þore to lende: (われ地より汝を取り、我が手により汝を造り、美麗しき地なる楽園に住まいさせんと汝を其処に置きしに)

(4) H 311/24 a, foule, this nyghte *þe fendis of helle thy saule sall fra the refe*; (おお邪悪なる者よ、今宵地獄の彼の悪鬼汝からその魂を奪い去るは必定)

そしてその多くは、その内容のために、擬古的文語体或いは韻文体を想起せしめる調子で書かれている。それは書簡体作品の中に挿入された韻文にはこの語順が用いられていることから明らかであろう。*Ego Dormio* 中の *Cantus amoris* (MS. Vernon) の例:

(5) H 60/7, 8 in to þi light *pou me lede*, and wiþ þi loue *pou me fede* (御身の光にわれを導き、御身の愛にわが糧を得さしめ給え)

これらの例から、著者 Rolle の各作品に対する文体的考慮・意図の全般を推しはかることはすべきでないし、また不可能でもあるが、少なくとも、この語順の使用例の分布を見る限りでは、彼は書簡体作品についてはこの語順が想起させるような文体を意図したのではなかったろうと言わざるを得ない。彼の書簡体作品はそれぞれ特定の或る人物に対してその教育・教導を目的として書かれたものであることは明らかである。*The Form of Living* は Margaret Kirkeby 或いは 'Margaret la Boteler nun of Hampole' と呼ばれた隠遁生活に入って間もない若い修道女に宛てて書かれたものであり、*Ego Dormio* は、Cambridge 大学図書館所蔵の MS. Dd. v. 64 においては Yedingham の或る修道女に献呈されているところから、その彼女に宛てて書かれたものと考えられる。また *The Commandment* も、名前は判明していないも

の、1人の或る修道女に対して書かれたものであることは間違いない。⁽⁷⁾N. F. Blake は中英語期の宗教散文の中の教育・教導を目的とする散文に、特定の聴き手を対象として書かれた作品群と不特定多数の聴き手を対象とする作品群の2種を区別する。⁽⁸⁾前者を第一次教導物 (primary instruction)、後者を第二次教導物 (secondary instruction) と呼んでいるが、Rolle の作品は大まかに分ければ、書簡体作品は前者に入り、*Meditations* などは後者に入れることができるであろう。彼の書簡体作品はその説く所時に熱を帯び高揚するが、その調子は概ね平静で静かな語り口であり、それは擬古的文語体や韻文体を想起せしめない調子で貫かれ、やや口語的な、と言ってもけっして論理的緊密さを失うことのない説教体、或いは説教書簡体とでも言うべき文体に主として支配されている。Rolle の各作品間における S-O-V 語順の使用例の分布状態は、極めて端的にその間の事情を裏書きしていると見なされて良いであろう。

さてわれわれは、これまでの所で、Rolle の散文作品の語順を論じるならば、Rolle においてはその書簡体作品を、別個に扱う必要性のあることを、主として共時的な観点から見たが、次に通時的な観点からもそのような

分類が要求されるのであろうかという問題が生じる。そこでこの独立節における S-O-V 型語順の使用状態を Rolle の時代と相前後する時期の他の作品について調べて見ると第2表のような結果が得られた。比較の資料とした作品は Ælfric の *Catholic Homilies* 中の St. Stephen の受難を述べた章 (以下 *Stephen* と略す)、*Peterborough Chronicle* の *Continuations I, II* (それぞれ *P. C. C. I, P. C. C. II* と略す)、⁽⁹⁾*Ancrene Wisse* Parts 6, 7 (*AW* と略す)、⁽¹⁰⁾*The Book of Privy Counselling* (*Privy* と略す)、*The Book of Margery Kempe* (*Margery* と略す) ⁽¹¹⁾である。なお *Rolle₁* は Rolle の書簡体作品を、*Rolle₂* はその他の作品を示す。また参考のために従属節におけるその分布も付記しておいた。

この第2表は、語順を問題とする限り、通時的観点からも Rolle の作品は書簡体作品とそれ以外の作品という最小限2種には分類して論じなければならないこと、また、語順における 'modernity' が主張できるとすれば、書簡体作品においてであること、を示すものである。

以上 S-O-V 語順についての調査から得られた所を述べたが、勿論これだけではさきの Chambers の主張の妥当性を検討するに

第2表

		<i>Stephen</i> (991-92)	<i>P. C. C. I</i> (1122-31)	<i>P. C. C. II</i> (1132-54)	<i>AW</i> (c1230)	<i>Rolle₁</i> (a1349)	<i>Rolle₂</i> (a1349)	<i>Privy</i> (?a1400)	<i>Margery</i> (?a1440)
Non-dependent Clauses									
S-On-V	(a)	+	-	-	-	-	+	-	-
	(b)	+	+	+	-	-	+	-	-
S-Opr-V	(a)	+	+	+	+	-	+	-	-
	(b)	+	+	+	+	-	+	-	-
Dependent Clauses									
S-On-V		+	+	+	+	+	+	+	-
S-Opr-V		+	+	+	+	+	+	+	+

は不十分である。同種の調査を他の minor な型についても、また major な型についても試みる必要がある。しかしその検討はさきの拙稿の主題とする所であるからここで立ち入ることは差控えたい。ただ、少なくとも語順を文の主成分間の配列の問題に限り、また Rolle の作品を書簡体作品に限るならば、Chambers の主張は妥当性を持つと言えるという確認ができたことは報告しておかなければならない。また、書簡体作品に擬古的な文語体を用いず、当時の口語への近接性を示していると思われる文体を採用したところに、Rolle の文体感覚・言語感覚の近代性を認めることができそうであることもまた付言しておくべきであろう。

2

前節で独立節における S-O-V 型語順が Rolle の場合作品間の文体的考慮の相違を示す指標の一つとなっていることを、その語順の使用例の分布状態の偏りをもとに論じたが、その結論は実は或る調査を必要とするものであった。本節ではそれについて報告をしておきたい。

それは、前述の作品間における使用例の分布の偏りが、果して純粋に著者の文体的考慮に基づくもののみを示し得ているか否かの検討を可能にするための調査である。すなわち、その分布の偏りが写本の相違によるに過ぎないのであれば、また作品の著作年代の相違によるに過ぎないのであれば、文体的考慮云々という議論は無意味となるからである。Rolle の各作品には多くの異写本があることはさきに触れたが、それらはまたそれぞれ時代と方言を異にしている。そこで諸写本間の異同の調査がそのために必要になってくるのである。また、作品の著作年代の相違による違いも考慮しなければならなくなってくるのである。

著作年代については、書簡体作品のそれは比較的はっきりしている。一番古いとされている *Ego Dormio* が 1343 年前後、次いで *The Commandment* が書かれ、*The Form of Living* が 1348-9 年に成ったとされている。1349 年は彼が、おそらく当時猖獗を極めていた黒死病のためであろうと思われるが、病没する年である。その他の作品の著作年代については、不明のものもあるが、*Meditations* など主なものは何れも 1340 年代すなわち著者 40 歳代の頃の作であろうとされている。となれば時期的には書簡体作品を著わした時期と重なる訳で、従って、偏りが著作年代の相違によって生じる可能性は少なく、それは一応除外して考えることができると考えられる。

そこで残るのは写本間の問題である。さきに触れたように Rolle の作品の写本は数が多く（例えば *The Form of Living* では 38 を数える）、マイクロフィルムやファクシミリ・刊本等の形でいくつか調査は出来るものの、結局現段階では部分的な調査に終らざるを得ず、その調査報告も中間報告の形を取らざるを得ない。しかし入手し得た資料⁽¹²⁾は、方言的にもまた成立年代の上からも或る程度適当なばらつきがあり、この調査の結果が概ね問題の実相を示し得ているのではないかと考えられる。その調査結果をまとめたものが第 3 表である。なお表の中で *The Form of Living* の XI 章を別にしたのは、それが MS. Dd. v. 64 にはその作品の章の数を *Emendatio Vitae* の章の数 12 に合わせるために XI 章として挿入されているが、元来は Thornton MS. や B. Mus. Arundel 507 に見られるように独立した作品であったと考えられるからである。また、参照の便を考慮して Horstman 版のテキストの該当ページを記しておいた。○は当該の作品がその印の記入のある欄の写本に書写されていることを示す。

第3表

	Dd. v. 64	Harl. 1022	Vernon	L1. i. 8	Arund. 507	Rawl. A 389	Thorn.	Rawl. C 285	Camb. Add. 3042	e Musaeo 232	Longle- at 29
	L14c (N)	L14c (N)	L14c (S)	L14c (non-N)	c1400 (N)	E15c (S)	c1440 (N)	15c (N)	15c (EM)	15c	15c (non-N)
1. <i>The Form of Living</i> (3-45, 46-9)	○—	○—	○—		○—	(○)		○—			
XI. <i>Seven Gifts</i> (45-6, 196-7)	○—						○—				
2. <i>Ego Dormio</i> (49-57, 60-1)	○—		(○)		○—	○—					
(57-60)	○—		○—		○—						
3. <i>The Commandment</i> (61-71)	○—		(○)			○—					
4. <i>Meditations on the Passion</i> (83-103)				○+4					○—	○—	
5. <i>Meditation on the Passion and of Three Arrows on Doomsday</i> (112-21)					○+2			○+5			
6. <i>Our Daily Work</i> (137-56, 300-5)					○+2						
(310-21)							○+4				
7. <i>On Prayer</i> (295-300)							○+4				
8. <i>Gasftly Gladnesse</i> (81)	○—						○—				○—
<i>The Bee</i> (193-4)							○—				
<i>On the Ten Command- ments</i> (195-6)							○+1				
<i>Desyre and Delit</i> (197)							○—				○—

(○) は当該の作品がその写本に書写されているが未調査或いは資料の未入手のため未確認であることを示す。+ の後の数字は用例の数を示す。L, E はそれぞれ Late, Early を、また (N), (S) 等は方言を示している。

第3表は, Rolle の書簡体作品にはこの語順は, 写本間の方言的違い, 書写年代の違いに関係なく一例も現われていないことを示している。未確認の写本の数の方が多い現在断言は控えなければならないが, 確認できたものの中には主要な写本が殆ど含まれているので, おそらくこの結果は変わらないであろうと予想される。また, この語順の使用例の分布の偏りが一つの写本の中で際立って示されている例は MS. Rawlinson C 285 である。そこでは作品 5 にこの語順が 5 例見出されるに対して, 書簡体作品である作品 1 には 1 例も見出されないのである。なお, 4, 5, 6 の作品に見られる写本間の用例の数の違いは, その対応箇所の文章ないしその語順が写本間で一致していないことを示している。例えば, さきの例文 (2) は MS. Rawlinson C 285 からのものであったが, MS. Arundel 507 におけるその対応箇所は次に示すように, 文が 1 個欠けており, しかも *bot* 以下は能動態が受動態に変わっているのである。

(6) H 114/13-15 & als nakid as he
was borne—bot his moder couerchiefe
was knit aboute his lymes.

以上のような調査結果から, 独立節における S-O-V 型語順の分布の作品間での偏りは, 純粋には言えないまでも, 相当程度著者の文体的考慮の結果を反映したものであると解して良いと考えられる。従ってこれをその指標の一つとした前節の結論はこの語順に関する限り更に根拠を得たと言うことができるのである。しかし今後他の未確認の写本の調査をさらに進めてその根拠をさらに固める

とともに, その他の観点からの資料も加え, Rolle の散文文体の特徴とする所を, その背後にある Rolle の時代の言語状況を常に考えつつ, 理解することに努める必要があろう。また同時に authorship が確定されていない作品についてこの種の語順研究の成果がその確認作業の段階で寄与し得る面がないかどうかの検討も今後必要となるのではあるまいか。

註

1. H. E. Allen, *Writings Ascribed to Richard Rolle, Hermit of Hampole, and Materials for his Biography*. The Modern Language Association of America Monograph Series No. 3, New York, 1927.
2. C. Horstman (ed.), *Yorkshire Writers: Richard Rolle of Hampole, an English Father of the Church, and his Followers*, 2 vols., London 1895, Vol. II, pp. 283-292.
3. *Ibid.*, Vol. II, p. xxxv.
4. R. B. Mitchell, "Syntax and Word-Order in *The Peterborough Chronicle* 1122-1154," *NM*, LXV (1964), 113-144; なお拙稿「初期中英語における S. Noun O. V. 型の語順について」『一橋論叢』67 巻 2 号 (1972), 246-251 参照。
5. H. E. Allen, *op. cit.*, p. 81.
6. H は Horstman 版のテキスト (Vol. I) を指し, 数字はその該当ページと行数を示す。
7. 以上については H. E. Allen, *English Writings of Richard Rolle*, Oxford, 1931 の各作品のそれぞれの解題を参照されたい。
8. N. F. Blake, "Varieties of Middle English Religious Prose," *Chaucer and Middle English Studies in Honour of Rossell Hope Robbins*, ed. Beryl Rowland, London, 1974, pp. 348-356.

9. 以上の資料は R. B. Mitchell, *op. cit.* による。
10. 拙稿 Tadao Kubouchi, "Word-Order in the *Ancrene Wisse*," *Hutotsubashi Journal of Arts and Sciences*, XVI, 1 (1975), pp. 11-28 による。
11. Alfred Reszkiewicz, *Main Sentence Elements in The Book of Margery Kempe. A Study in Major Syntax*, Warsaw, 1962 による。
12. 諸写本のテキストは前掲の C. Horstman, *Yorkshire Writers*, Vol. I; H. E. Allen, *Writings Ascribed to R. Rolle* 及び *English Writings* 所収のそれを現在東京大学教養学部寺澤研究室に置かれている中世イギリス研究資料センター所有の写本マイクロフィルムで確認して用いた。MS. Vernon の *The Form of Living* については、前掲の『英語の歴史と構造』所収の宮部菊男教授校訂のテキストを用いた。

追記 本稿の作成にあたって、宮部菊男先生からは諸写本に関する貴重な資料をいただき、また多くのご教示を受けた。また小野茂先生からも多くのご教示を受けた。ここに厚くお礼を申し上げたい。

なお、本稿は昭和 52 年度文部省科学研究助成に基づく研究分担課題の成果の一部である。